

機工
店支
木村
金沢

北陸の気候捉え工場空調提案強化

自然派H G空調で顧客課題に対応



能田 智史 所長

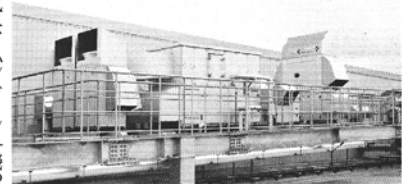
業務用・産業用空調システムメーカーの木村工業（社長＝木村晃氏、本社・大阪市中央区）の金沢支店（支店長＝能田智史氏、所在地＝金沢市広岡1丁目1-35）は、北

陸3県と新潟県を管轄し、地域に根差した営業活動を展開している。官公庁施設の更新需要に対応するとともに、近年は外気処理や工場空調の提案に注力。北陸地区の産業特性や気候条件を捉え、工場の暑熱対策や陽圧化を切り口に、顧客の課題に応じた提案を進めている。

北陸地区の市況について能田智史支店長は「足元、県や業種によって設備投資の動きに濃淡が見られる」と話す。石川県では工作機械や産業機械

関連の企業による投資が続いており、工場の新設・増設計画に対して設計段階から提案活動を展開する。一方、繊維産業では能登半島地震の影響が残る。地域産業の再生に向けた動きもあり、今後の需要を注視している。

富山県では医薬品関連の大型投資が、服する一方、医薬品や食品を保管する低温倉庫など、高度な温度管理を求める引き合いが続く。「幅広い温度帯に対応できる製品ラインアップを生かし、お客様の用途に応じた提案を進める（同）」とする。福井県では半導体や電子材料などに関連する工場案件を開拓。高い除湿性能が求められる施設に対し、空冷HP式ツイ



食品工場に設置されたツインサイクル冷凍機と外調機

ンサイクル冷凍機（HP）外調機を中心とした提案領域を広げている。北陸地区で外気処理機への理解が進んだのはこの5年ほどで、立形ルーフトップ外調機やツインサイクル形外調機の採用件数も増加してきた。かつてはファンコイルユニットメーカーという印象が強かったが、制御を取り込んだ特

徴ある外気処理技術を持つメーカーとしての認知も着実に広がっている。採用後の評価が新たな提案につながるケースも見られる。設計事務所が採用した空調方式について、建物のオーナーや利用者から評価を得たことで、同一企業の別拠点でも同様の方式が検討されるなど、導入実績を足掛かりとした横展開につながる動きも出ている。能田支店長は「製品の特徴を理解していただいたお客様からは、再び声を掛けていただくことも多い」と手応えを示す。

北陸地区では夏場の高温多湿に伴い、工場内への熱や湿気の流入を抑える陽圧化への関心が高まる。冬場は低外気温によって霜取り運転が増えやすいため、寒冷地の冬季運転に対応するオフショア機能を備えた立形ルーフトップ外調機への要望も増加している。特に暑熱対策は緊急性が高く、設備工事会社などと協力しながら具体的な対策につなげる。

「北陸でも大阪や東京と変わらないほど気温が上がり、加えて湿度が高いため、暑熱対策は待ったなしの課題となっており、相談を受けると早期の実施を望むお客様も多い。陽圧化を一つの切り口として、工場の労働環境改善につながる提案を広げたい（同）」と話す。

こうした取り組みを通じて、同社が中長期的に訴求を進めるのが「自然派ハイクレイド（H G）空調」だ。水やHP、熱回収技術などを活用し、快適性と省エネ性の両立を図る同社独自の空調思想である。金沢支店でも北陸地区の気候や建物用途に応じた展開を図る。今後はその一環として、水冷HP式システムを活用した「全天候型空調」の提案にも取り組む。低温水式と直膨式を適材適所で組み合わせ、快適性を高めながら冷媒使用量や漏えいリスクの低減につなげる考え方を訴求する。能田支店長は「単に冷やす、暖めるだけでなく、温度、湿度、清浄度、気流を整える本物の空調」を提案していく。今後も空調に関する困り事があれば、「木村工業なら一緒に解決策を考えられる」と頼っていただける存在であり続けたい」と展望する。